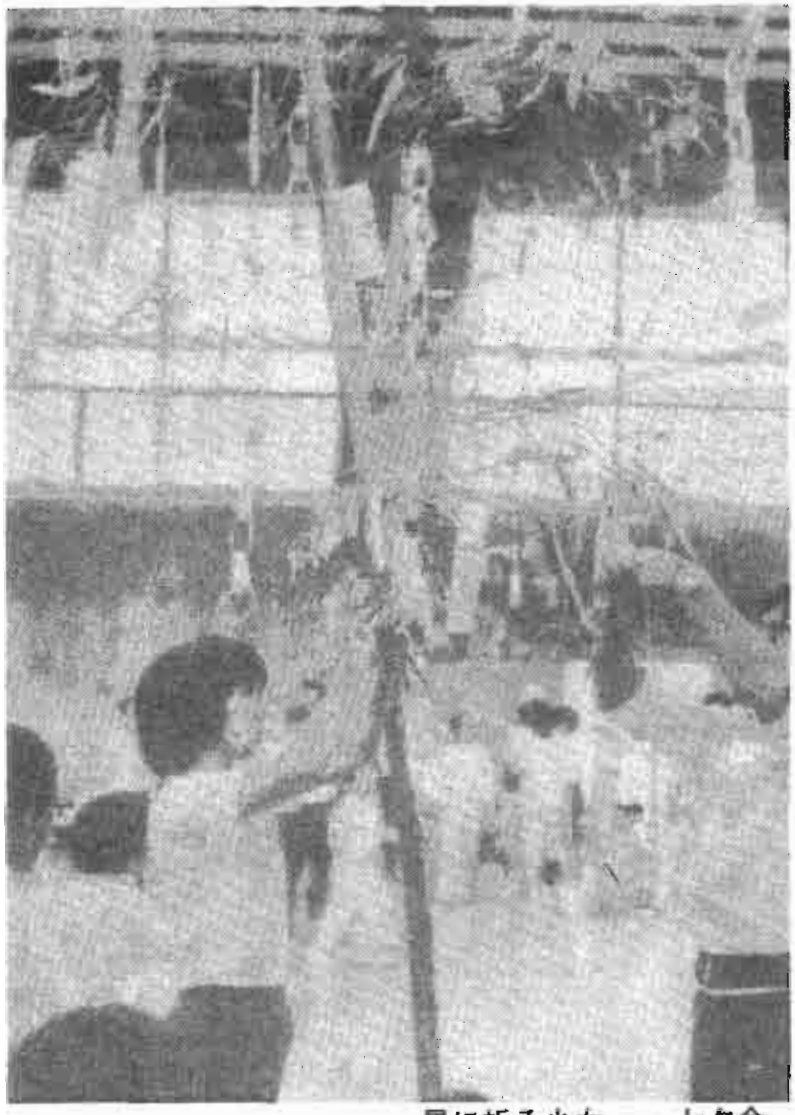
かいはつ

第7号

「親と子と教師の集い」をふりかえって

岡崎市特殊教育推進協議会
昭和57年11月24日発行
（題字　葵中　3年）



星に祈る少女 ── 七夕会

見なおす

特殊教育部長
長坂一昭

晴れた秋の一日、六年の子どもたちと野外観察に行った。護岸工事で、田が壊され、断面が露出しているところを見つけた。表土のよく肥えた黒い作土層、保水のための赤土の田床層、その下に、自然の砂層、礫層がはっきりと見られる。流水の攻撃面にあったあたりの田では、赤土層が普通の田の三倍程厚い層になっている。子どもたちが測ると二十七糎の層であった。

子どもたちが観察メモをとっている。わたしは、谷間に広がる田を見わたし、あちら、こちらへと歩を進めてみた。江戸時代か、明治の頃か、ブルトーザーのなかった時代に、田ひとつ、ひとつが、一鍬一鍬の営みによって開発された歴史を思い、心をうたれる。「いつごろ開発されたか、聞いてみようか」と子どもたちに声をかける。

この観察によって、いつも行き来する学区を、あらためて見なおす機会を得る。田の断面を見い出し、田床の赤土層に対面する。それは怠けがちなわたしを励まし、意欲を支えてくれた。

ふと、特殊教育の機関誌「かいはつ」への執筆依頼を思い出す。その一瞬、「一鍬一鍬の営み」が「かいはつ」の心ではないかと思う。障害をもつ子どもたちへの「一鍬一鍬」の根気強い営みによって、「かいはつ」がなされると思う。

わたしは、つくづく、あらためて「見なおす」ことの大切さを感じた。

時折、「あらためて見なおし」、特殊教育の推進に精進したいと思う。

岡崎市小中合同 親と子と

日程

7月7日(土)
- 9:00 自然の家集合
- 10:00 入所式
- 10:30 七夕会準備（飯ごう炊さん）
- 12:00 昼食（カレーライス）
- 14:00 親と兄弟の集い（七夕会）
- 16:30 保護者ミーティング（交歓会）
- 19:00 夕食（入浴）
- 自由（ウォークラリー）
- 日記
- 22:00 ホタル観賞・就床
- 23:00 消灯

7月8日(日)
- 自由・就床
- 7:30 朝の集い
- 8:00 朝食
- 8:30 清掃
- 9:00 野外炊飯と遊び
- 10:00 閉所式
- 11:00 解散

作品展

▲ 落ち葉スキー

緑丘小　5年

くうんと高い木々の間を、猛スピードで走るスキー。まるで、天狗の目から見たような愉快な構図だ。楽しい感じがこだましている。動きのある作品だ。

ロープのぼり

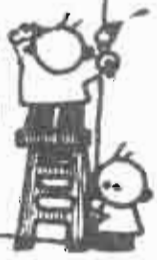
福岡小　6年

ぐんぐんと大きなのぼり。力強い握ったロープ。きゅっとつかんだ腕かたくましい。七夕飾りと並んだ中、高いや、遊ぶ友だちが、あんなに小さいや。

◀ 花火

美川中　1年

ほら、両手に持った花火。僕も、まわりの何もかもが、赤や黄に染まって輝いている。心の奥に焼きついた強烈な印象を、一気に表現している。鮮やかな絵だ。



親の声 アンケートから

一　よろこびの声

◇　自分の学校だけの特殊学級では、小さな集まりの中での子どもしか、わからなかったが、市内の子どもたちという大きな集まりの中での自分の子どもを見ることができた。ガッカリしたこともあったが、希望を持ったこともあり、親として、新たな気持ちがわいて、良い会だった。

◇　クラスや学年の違う父兄と話し合う機会に接したことがなかったが、この会で話し合うことができてよかった。

その子どもを見ながら、その子どものお母さんの苦労、悩み、生長の様子などのお話を聞いて、私の励みになった。

◇　童海中学の校長先生から、「障害はあれど、中学生として真剣に励む子どもたちのお話を聞かせていただいて、どの子も、どの親も、どの先生もほんとうに真剣であることを改めて感じ、参加したかいがあった。

二　要望の声

◇　七夕会、花火、ゲーム遊びに大喜びする子どもたちの目は輝いていた。見ている方も楽しかった。来年も、このような会を計画して欲しい。

◇　親と子どもで、山でカレーライスがつくりたかった。山のカレーライスが食べられるように、天気の良い日を選びたい。

◇　生まれて初めて、親の手を離れて宿泊させてしまい、本当にありがとうございました。普通児と違って、こうした機会はなかなかないので、一年に一度は、計画を願います。

生活単元学習　山の学習

矢作東小

一、事前指導

・保護者と「山の学習」について話し合いを二回する。

・教師との話し合いや絵を描いたりして、いつ、どこで、何をするか――をわからせる。

・バスの乗降、山での注意、飯ごう炊さん、子どもの集い、持ち物、服装等について学習する。

・七夕まつりのかざりを作ったり、歌の練習をする。

・前へ並え、気をつけ、休め、笛の合い図で集まる、並んで歩くなどの集団訓練をする。

二、当日の様子

・雨天のため、入所式は体育館で行う。環境、雰囲気のせいか、T児が少し興奮気味。

・各学校で自由活動。母親から離され、「お母さん」と泣くS子。体育館内を走りまわる一児。それでも、天井から下がるロープが、どの子も気に入り、楽しそうにぶら下がっている。映画は漫画だけ見る。

・散歩と自然観察は、ハイキングコースの道を歩く。草や木に興味を示す子、坐りこむ子、ひとりひとりが異なった行動や表情をする事が観察できる。

・七夕まつり。飾りつけを手伝う子、関心がなく遊ぶ子。

・全般的に、どの子も、いつもより生き生きとしていた。

三、事後指導

・心に残ったことを作文や絵にかく。

活動の喜び
――ふれ合い――

石川シイ　小　福岡

「ふれ合い」の楽しさを味わわせ、心豊かな子供に育てようと心掛けてはいるものの、その機会はなかなかむずかしい。

少年自然の家での「親と子と教師の集い」は市内小中学校児童生徒、親と教師四百名近い人々が活動を共にして、温かく接し合い、神聞意識をはぐくむ「ふれ合い」の場でありました。

子供達の体育館での遊びは、一人ひとりが、先を争ったりすることなく、他校の子ども達とゆずり合い、溶け込んで、思い切り楽しみました。

集いは、緑の木々をバックに胸を開いて、悩み、手だてを話し合った、ふれ合いの場でありました。

少年自然の家での子供達は太い縄にぶら下がり奇声を発し喜んだターザンごっこ。高く積み上げたマットから、思い切り飛び下りる。など今迄体験したことのない遊びを次から次へ、他校の子供達とゆずり合い仲よく喜々と活動しました。大きな竹に、自作の飾りをいっぱいつけ、歌声ひびく七夕祭り……、学校では見られない子供達の喜びの姿でした。

参加したお父さんのひとりは「市当局をはじめ、先生方がこんなにまで子供達のために心を砕き、取り組んでおられる努力に感動しました。」と、お別れに深々と礼をのべられました。

教師の声 アンケートから

◆「カレーのおかわりちょうだい。」体育館での遊びや山歩きにも、夜のキャンドルサービスや花火にも、子供たちの目はいつもと違って輝き、その感動は担任たちの目を見張らせるものがあった。さらに、たとえ直接的交流は少くても、同じ仲間たちとの自然の交流に恵まれた効果も大きく、この行事の意義深さを感じさせてくれ、保護者への期待にこたえられたようである。

◆「はじめての大行事」のためこれにかかわる方々の配慮と尽力には謝意がわいてくる。担任としても、自分の受け持つ子供たちへの全く目の離せられない細かい心づかいと、重度障害児を持つ教師や保護者への苦労を察しなければいけない。

◆「雨天決行。」行事の事前計画のだいじなことはいうまでもないが、天候に左右されたり、突発性、偶発性を潜める子供たちが対照であるから、当事者としての我々担任一人一人が充分な準備をしていく必要が最も大切ではなかろうか。

◆「もっと計画の充実を。」「いや、のんびりの方がいい。」是否、修正などが混然としていたが、今後、この行事の趣旨を検討吟味し、この場限りで終わらぬよう、特殊教育の原点をさがし求めていかねばなるまい。

障害児と保育

市児童課課長補佐
河村芳子

障害児の福祉を基本として考える時、そこには通常の保育には見られない困難な問題もある。障害を持つ子を、他の子と隔絶することなく、幼児集団の中で、生活を通し望ましい発達を助長すると共に他の子どもも含めて、自分以外の人を認め、一緒に過ごすには何が必要か、何を育てねばならぬのか――統合保育の活動を通し、豊かな人間愛の育つことに、大きな意義を見つけ出すことができる。

従来の保育は、一定レベルを目標にしていた。その方が保育はし易いが、保育の本質から考えた時、子どもはいろんな個性を持っている。そのよい要素は潰さず、悪い要素は丸く納めながら、その質を育てるのが保育である。十把一からげで幼児に「あれしよう。」「これしましょう。」では持っていたかも知れぬ才能が出せずに終ってしまうかも知れない。

現在では「ひとりひとりを伸ばす保育」にと、個々の発達の保障が見直されてきた。障害を持つ子たちも、ひとりひとりの発達をどのように援助していくかは、保育の中味にある。どうしたら障害を治せるかに心奪われるのでなく、表現のつたない子の心を和ませ、共にやっていこうとするには、どうすべきか。手を差し伸べるだけでよいのか。

障害のある子の本当の幸せを願う時、思う。「本能的な幸せは十分与えられると不満に変わる。」物の豊かさは心の貧しさを生む。「苦労する幸せ、一つのことを成し遂げた幸せは自信となり自分の支えとなる。」心の内に芽生える喜びとなり、それが「生きる喜び」と高まり、一生持ち続けられる援助を保護者や地域の人々と共に目指したいと思う。

（岡崎市就学指導委員）

学級スナップ

「赤トンボ」

山中小

藤川、本宿学区の二人をまじえた四名で今年の四月からできたホヤホヤの学級であり、全員個性豊かで、天真爛漫であるので学校中から声がかかり子どもたちは喜々としている。

「やぶた」が「あぶ」になったり、すぐに手が出たり、かんだりする子らであるが、授業が面白くなければソッポを向き、教材研究不足を態度で示してくれる、まったくたのもしい。

一人教室で「魅力ある授業」を思っていたら空に赤トンボ、山中の自然は私の良い味方だ。

出発進行！　あぶ先生ものって

岡崎特殊教育の歩み(五)

特殊学級(知恵遅れ)連尺小に開設

戦後の部

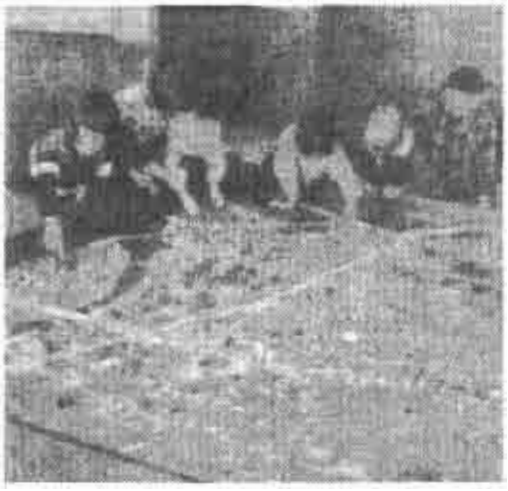
私が担任だった頃

元連尺小教諭
磯貝一夫

新陽性転化児童を養護学級に編入し、結核から護ることを目的とした特殊学級は、昭和三十五年三月に終止符を打って、病弱虚弱児の特殊学級が、一年、二年各一学級編成されました。

◆新設の胎動

養護学級の経験のある鈴木民子教諭と新転入の宮嶋幸子教諭が担任として発足しました。ところが、入級した児童が、病弱虚弱児というよりも、いろいろ問題のある児童が多く、特に学業遅進児がほとんどでした。両担任は、これでは病弱虚弱の指導はできないから、担任を辞退したいと校長に申し入れました。校長は、本年度はこのままで頼む、その代りに来年精神薄弱児の学級を新設して、内容を一新するからと、両担任を説得しました。そして、非公式に、精神薄弱特殊学級設置の研究会を持ちました。



全国大会授業風景S 37. 11

◆準備の一歩

私は、その一員として、先進校碧南新川小、安城中部小等を尋ねて、学級編成指導法等を教えていただきました。県教委は西三河地区には青木小、西尾小を入れた四校にしか、特殊学級がなく、岡崎にはないので、設置に援助してくれました。岡崎児童相談所も賛成で、児童の判定その他に協力していただけました。

◆二十四の瞳

昭和三十六年四月、病弱虚弱学級は、改造して存続し、精薄学級が誕生して、私が担任となりました。クラスは一年より六年まで十二人で、軽中度児でした。名付けて「二十四の瞳」としました。

学校長を始め、職員PTA全校児童のご理解とご協力によって、学級はスムーズに発足し、私は無茶苦茶に頑張りました。学級経営は、全く私に一任していただき、勝手なことをして、みなさんに迷惑もおかけしました。研修では、長期的なもの、他府県にまで出張させていただくものなどで、休日なしでした。しかし、私の教員施設職員四十二年間に楽しくやりがいのあった六年間でした。

◆岡崎手をつなぐ親の会

三十七年二月、特殊学級の保護者が中心になって、「岡崎手をつなぐ親の会」が結成されましたことも、特記すべきことです。当日、連尺小学校自主的研究発表会「特殊教育について」が行われ、研究会後、引き続いての発表式です。親の会は、毎月、教育大の沢田先生を講師にして行い、児童相談所の坂内判定係長のご指導も受けました。ガリ刷りの会報も発行されました。

全国大会協議会 S 37. 11

◆学級増の運び

四月の初めに、県より精薄特殊学級一学級増の通知がきました。が、教員配当なしでしたので、教育大に頼んで、新卒をいただきました。

当時、重度児、学区外の希望者があって、もう一学級増設を希望していたので、早速、学区外児で一学級としました。

◆学習と遊びと

指導内容方法等は、先輩たちの実践記録を手本にして計画しました。軽度児には、教科学習も学業遅進児の指導と同じにできました。算数の内容が、効果が解かり易く、遠山式水道方式は有効でした。遊びから学習へ、遊びの中で学習を楽しんでやりました。遊びも重視しました。岡崎公園は全く校外学習に好適な場所でした。また、この頃、飼育栽培が花形でした。飼育小屋、小鳥小屋、飼育箱、花壇、鉢植え等をやりました。うさぎは、子うさぎを分けて、児童は家でも飼いました。

◆全国大会分科会場に

そうして、三年目に突然、愛知県が特殊教育全国大会会場になり、連尺小、梅園小が分科会場となりました。

編集後記

「親と子と教師の集い」から四カ月がたちました。短冊を飾る少女の表情に、澄んだ美しさを感じます。子ども達の祈りが、天にとどいたに違いありません。